



清々しいあるピアニストの青春

ジャーナリスト
松本 侑壬子

日本にも若く素晴らしい盲目のピアニストがいるけれど、この映画で台湾にもこんな素敵なピアニストがいることを知った。みずみずしい映像と美しいピアノで描く実話に基づく映画。

ホアン・ユイシアンは生まれつき目が見えない。四歳から始めたピアノでめきめき才能を発揮、幼くしてピアノ・コンクールで上位入賞を繰り返すが、ある時からコンクールに出場できなくなる。母親は将来ピアノの仕事で自立できるようにと、思い切ってユイシアンに家を離れて高等専門教育を受けさせたいと考える。

映画は、盲学校を出たユイシアンが台北の音楽大学に進学するところから始まる。主人公のユイシアンを本人自身が演じているので、まるでドキュメンタリーのような臨場感だ。繊細なピアノの音色とともに、穏やかな笑顔と誠実な人柄が直接画面から伝わってきて、いっぺん

で身内のような気持ちになってしまう。ユイシアンの母親、担任の若い指導員、そして心を通わせるダンサー志望の少女シャオジェなど彼の周りの女性たちが、いずれも愛情深く、しかも毅然としていて素晴らしい。

生まれて初めて親元を離れて寮生活をするユイシアン。階段は段を数えながら下りる、廊下の壁を手で触りながら進む、通路わきには十歩ごとに木があり、四本を過ぎると足元が危なくなり、八本目を過ぎたところが入口……と、視覚障害者の視点から具体的に日常生活が描かれる。教室移動の付き添い当番の学生に冷たい言葉を浴びせられ、戸惑いと不安に襲われる。障害者に対する心ない言葉といえは、小学生でコンクールで優勝したとき「目がみえないから」同情賞だ」と陰口を言われ、それがトラウマになり、以来人前で演奏することができなくなったのだ。

だが、そんな人間ばかりではない。豪快な太っちょのルームメイトらとバンドを組んでたちまちユイシアンは人気者になる。クラシックばかりではない、今風の冒険も入れた自由な演奏でバンドを盛り上げる。ふとしたことで知り合ったアルバイトの女の子シャオジェは、大好きなダンサーへの道を親に反対されて迷い悩んでいたが、ユイシアンの姿を見て、奮い立つ。自分も目隠しをしてユイシアンと一緒に歩き回った後、テープに吹き込んだ彼女の言葉が素晴らしい。

「光のない世界では、踏み出す一歩に大きな勇気が必要なこと。辛いこともすべて人生の妨げなのではなく、大きな決意につながることを」を知った、と。そして、夢を捨てきれないのなら、他人に認めてもらうように頑張るべきだと思おう、とも。その証明のようにシャオジェはダンスのオーディションに挑む。同時刻、バンド仲間と出場したコンクールで心を込めてユイシアンが弾くピアノ・ソロが、踊るシャオジェの画面に重なる。しなやかな彼女の動きを支え鼓舞するかのようなユイシアンのピアノ：美しく忘れがたい場面。自分のピアノで彼女や仲間たちの力になれる、一緒に楽しめる、その実感が、その喜び。見る者の心の中にも明かりが灯り、視界が開けてくるようだ。

『光にふれる』

台湾・香港・中国合作映画(110分)

監督：チャン・ロンジー

出演：ホアン・ユイシアン、サンドリーナ・ピンナほか

2月8日よりヒューマントラストシネマ有楽町ほか
全国ロードショー

©2012 Block 2 Pictures Inc. All rights reserved.

